

## 露地小菊の電照技術による需要期集中出荷の実現

対象者 水口町 Y経営体

### 【普及活動のねらい】

Y経営体では後継者の就農を契機に、平成23年から水田を利用した8月咲き小菊を導入されました。翌年には9月咲き品種と年末出荷向けの寒小菊を導入し、小菊の栽培面積は50aにまで拡大し、Y経営体の主要部門に位置づけられています。

しかし、栽培の中心である8月咲き品種のほとんどが花芽分化とつぼみの発育に温度の影響を受けるタイプで、その年の生育期間中の温度条件により同じ品種であっても年によって収穫時期が異なることから、気温の影響により収穫時期のズレが緩和される技術の導入が望まれていました。

一方、県外の露地小菊産地では、日長条件により花芽分化を調節できるタイプの小菊に夜間電照を行うことで、収穫時期をコントロールする技術の普及が進みつつありました。

本県においてもこの技術の有効性を実証し普及につなげるため、Y経営体において調査研究を実施し一定の効果が得られたことから、技術の安定と取り組み規模の拡大を目標に2か年にわたり支援しました。

### 【普及活動の経過】

#### 1. 電照栽培に適した品種の選定（1年目）

電照による花芽分化抑制効果の高い品種群の中から8つの品種を選定し、消灯から収穫時期までの日数ならびに、草丈、草姿、花形などの外観品質を観察した結果、これら品種の中から当地域において栽培適性の高い品種として「すもも(赤)」、「山水(白)」、「やひこ(黄)」を選定しました。



処理中の小菊と電照器具設置の様子

#### 2. 面積拡大と需要期集中出荷の実現（2年目）

電照栽培面積を前年の1.2aから3.0aに拡大して本格的な技術導入を行い、技術の確実性や安定性を検証しました。

### 【普及活動の成果】

当地域においても露地電照技術は小菊の花芽分化をコントロールすることによりお盆の需要期の集中収穫・出荷に有効であることがわかり、この技術導入による需要に応じた出荷が実現し、Y経営体の収益向上にもつながりました。

ただ、電照期間中の不点灯により一部で早期に開花するというアクシデントが発生し、人工調節技術ゆえのリスクも明らかになり、これらリスクに備えた対策等の支援を進めます。

今後は、他の小菊農家へもこの技術の有効性を紹介し、導入を推進していきます。(森)



電照栽培実施ほ場（手前）